

株式会社ニッセイ基礎研究所

上席研究員 ESG研究室長 川村 雅彦 氏

Profile

1976年九州大学大学院工学研究科修士課程修了、三井海洋開発(株)を経て、1988年(株)ニッセイ基礎研究所入社。現在、保険研究部。環境経営、CSR経営、環境ビジネス、統合報告を中心に調査研究に従事。環境経営学会(副会長)などに所属。

著書は「環境経営入門」「SRIと新しい企業・金融」「カーボン・ディスクロージャー」「統合報告の新潮流」(いずれも共著)、「CSR経営パーフェクトガイド」(単著)など。



CSRの報告について：CSR経営の成熟

今年の冊子報告書(ダイジェスト版)には、日本化薬のグループCSR経営の成熟とそのグローバル展開への意欲が感じられる。来年度のグループ創立100周年を迎えるにあたって、CSR経営の基本的な枠組みが整いつつあることがうかがえる。冒頭の社長のトップメッセージからも、その熱意が伝わってくる。

報告書の全体構成は昨年とほぼ同じであるが、今年の「特集」はバリューチェーンを対象とした「安心・安全」であり、企業としての姿勢が明瞭で分かりやすい。事業特性を踏まえた取組の要点が簡潔に述べられているからである。

3カ年中期事業計画(“Challenge 100A!”)と連携する「中期CSRアクションプラン」は本年度で完了するが、自己評価として全体的に概ね“目標達成”とされている。しかし、どのような手続きで、どのような基準で評価したのかについては記載がない。評価が△や×の項目については、その課題や改善点を記載すべきであろう。全てが数値目標管理されている訳ではないので、報告書としての客観性や透明性の工夫が必要となる。

CSRの内容について：グローバル時代に適応するCSR体系化を

日本化薬のCSR経営の原点は、企業ビジョンであるKAYAKU spirit「最良の製品を不断の進歩と良心の結合により社会に提供し続けること」である。逆に言えば、これを実現させるための企業活動がCSR経営である。トップメッセージでは、「安全操業・コンプライアンス・環境への配慮を最優先事項として徹底し、高い倫理観をもって企業活動を行う」と説明されている。

これらはいずれもCSRとして不可欠ではあるが、日本国内で培われた思考の到達点であり、グローバル展開には十分とは言えない。最近では海外を視野に入れたCSR調達や従業員のダイバーシティへの取組も始まっているものの、世界的な人権・労働認識とは必ずしも整合的ではない。

そこで、「中期CSRアクションプラン」の見直しと再編をお勧めする。このプランは、基盤・社会的責任・環境責任・経済的責任の4分野・24項目から構成されるが、「企業の社会的責任」と「企業の社会的使命」が混在することから、両者を峻別した新たなCSR体系が必要である。

前者はISO26000の定義に基づき、「自社の意思決定や事業活動が環境や社会に及ぼす影響に対する責任」であり、自らのネガティブ・インパクトを改善するもの。しかるに、後者はいわゆるCSV(共有価値の創造)に相当し、自社の強みを活かした社会的課題の解決を意味する。例えば、社会的責任の(4)がんの研究・開発・製品情報開示、経済的責任の(20)環境・エネルギーに貢献する製品の上市や(21)経済負担を軽減する高品質な医薬品の提供などである。

「不易流行」という言葉がある。残すべきものは残し、変えるべきものは変えること。時代の変化に応じて自ら変化することで、企業は持続可能な成長が可能となる。日本化薬は、海外事業活動が進展する中で、「CSR経営の第二期」を迎えており、その実践体制も整備されてきた。そこで、次の100年の始まりに際して、大胆な価値創造への挑戦に期待したい。